

平成 24 年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

大阪府立で唯一の視覚障がいの支援学校であるという自覚のもと、培ってきた視覚障がいの専門性を維持・継承し、専門教育を実践する。全国の視覚障がい教育のリーダーとしての責任を果たす。

1. 幼児・児童・生徒の一人ひとりを大切にしたい学校
2. 府内における視覚障がい教育のセンター的機能を果たす学校
3. 教職員が教育者としての高いプロ意識をもった学校
4. 社会の変化に柔軟に対応し、職業自立を果たし社会に貢献する人材を育成する学校

2 中期的目標

1. 幼児・児童・生徒の一人ひとりを大切にしたい教育を推進する。
 - (1) 新しい学習指導要領が導入されることと併せて、幼児・児童・生徒の多様な進路に応じた教育課程を編成する。
 - (2) 個別の教育支援計画・個別の指導計画の様式や運用方法を見直し改善を図る。また、平成 25 年度までに指導要録への運用まで含めて、電子化を図り、学校全体で共有化する。
 - (3) 小・中・高における重複障がいのある児童・生徒の割合が 6 割を超えている現状で、視覚障がいの専門性に加えて、自立活動に視点をおいた教育の充実をめざす。
 - (4) 小・中・高・専と一貫したキャリア教育をめざす。中でも増加している重度重複の児童・生徒一人ひとりに応じた実習先・進路先の開拓と進路の実現をめざす。
 - (5) 視覚障がいの教材・教具の開発に努める。特に「タブレット型 P C」の活用を図る。中期計画推進費により校内に無線 LAN の環境を整備し、タブレット型 P C を活用した学習環境づくりをめざす。
 - (6) 安全安心な学校づくりをめざし、大震災をはじめとする危機に対する管理体制の整備を図る。
2. 視覚障がい教育のセンター的機能を果たす。
 - (1) 府内の視覚障がいのある幼児・児童・生徒の支援に努める。府内の視覚障がいのある子どもを担当する教員のネットワークとしての大阪視覚障がい教育研究会の活動の充実を図る。インクルーシブ教育の理念のもと視覚障がいのある子どもを支援する体制を常に整備する。
 - (2) 音楽科を中心とした活動は、本校の教育の柱の一つとしている。幼・小・中・高と一貫した情操教育のもと、本校の理解啓発のために地域の演奏活動に積極的に参加する。
 - (3) 高等部・専修部卒業後の社会参加を促進するため、地域の福祉・労働と連携し、視覚障がい者への理解啓発に努める。
 - (4) 専修部が視覚障がいのある高校生の高校卒業後の進路先の一つであるという情報を高校生及び高校教員に確実に伝えるため、積極的に理解啓発及び広報に努める。
 - (5) 専修部のあん摩・指圧・マッサージの臨床実習を、校内の臨床室だけでなく校外の福祉施設や公共施設等でも実施し、地域貢献及び視覚障がい者への理解啓発に努める。
 - (6) 視覚支援学校の歴史資料の整理をし、視覚支援教育のライブラリーとしての役割を果たす。
3. 教職員が教育者としてのプロ意識をもち専門性の向上を図る。
 - (1) 学部を超えた教科別研究会の充実を図り、教科指導の専門性を継承する。特に、O J T 等で専門性の向上を図る。
 - (2) 毎年、歩行訓練士養成事業に教員を派遣して、歩行訓練士の育成を継続する。
 - (3) 点字講習会への参加者を増やし、教職員全体の点字の専門性を向上させる。
 - (4) 特別支援学校教諭免許状（視覚障がい者に関する教育の領域）の取得率を、現在の 36% から平成 28 年度までに 50% 以上にする。
 - (5) 常に教職員の人権感覚の点検をして、幼児・児童・生徒の人権を尊重した教育を進める。
 - (6) 校内外の研修会・研究会に積極的に参加する体制づくりを行い、特に専門的な研修の機会が少ない専修部の教員の資質の向上を図る。
4. 職業自立を果たし社会に貢献する人材を育成する
 - (1) 視覚障がい者の職域の拡大を図るとともに、専修部において職業自立 100% をめざす。
 - (2) 専修部の情報処理科、音楽科の閉科から新たな柔道整復科の創設への移行が、スムーズに行えるよう体制整備を進める。

【学校教育自己診断の結果と分析・学校協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [平成 24 年 10 月実施分]	学校協議会からの意見
<p>○対象及び回収率 (H24/H23) 「児童(小)・生徒(中)(高)・学生(専)」(82%/64%)、「保護者・保証人」(85%/74%)、「教職員」(77%/72%)</p> <p>○質問のカテゴリ 昨年度と異なるもの(学校生活、保護者・保証人との連携、児童・生徒理解、教育課程、学校運営)と昨年度と同じもの(進路、生徒指導、授業、人権教育、学校安全)の 10 のカテゴリ ※昨年度より回収率が上がった。質問数を精選したことや授業アンケートとの同時実施などが理由と考えられる。</p> <p>○主な結果と分析 ※学校生活：児童・生徒の 7 割は、学校に行くことを楽しみにしているが、専修部では授業や実習が厳しいと否定的評価が見られる。授業改善や行事等の工夫を図りたい。 ※保護者との連携：学校からの情報提供は、教職員のほとんどは肯定的評価だが、保護者は 1～3 割が分からないと答えている。情報提供の取組みを徹底させたい。 ※児童・生徒理解：保護者・教職員の 7 割は、児童・生徒の障がいについて理解できていると答えているが、4 割の中学部の生徒が否定的に捉えている。各部の連携を一層密にして、情報の共有化を図りたい。 ※進路：中学部では取組みが評価され肯定的評価が増えている。逆に専修部では評価は少し減っている。就職環境が厳しいためと考えられるが、一人ひとりのニーズに応じた細やかな進路指導に取組みたい。 ※人権教育：専修部では、学生の否定的評価が 1 割減り、肯定的評価が 2 割増えた。昨年度の結果を受けて、人権について考える機会を増やした結果だと考えられる。</p>	<p>第 1 回 (11/21)</p> <p>○今年度の学校協議会について ※会議の内容を保護者も知りたいと思っている。保護者に還元する方法を考えてもらいたい。 ※地域の方がホームページ等を見て、傍聴を希望されるかもしれない。委員としても、協力していきたい。</p> <p>○平成 24 年度学校経営方針及び学校概況について ※100 周年を契機に、同窓会活動が広がってほしい。 ※新校舎建設に伴う計画外敷地は、視覚障がい者にとって有効に使えるようお願いしたい。今後の 100 年を見通して、視覚障がい者のコミュニティを大事にしていくスタンスでお願いしたい。</p> <p>○学校協議会への意見書について ※今回投書のあった意見は、個別対応が適当と思えるので、学校の方で適切に対応してください。</p> <p>○進路指導について ※理療科の就労先として医療機関も視野に入れ、指導していけばいいのではないかと。マッサージ業界としても協力したい。</p> <p>第 2 回 (2/19)</p> <p>○学校教育自己診断について ※年齢・障がいの状態等が多岐にわたっているため、自由筆記で書いてもらう方がリアルに掴み易いのではないだろうか。</p> <p>○授業アンケートについて ※生徒数が少ないので、一人ひとりの意見が重みを持つ。視覚支援学校は体験や専門性が求められるので、しっかりと研修をしてほしい。</p> <p>○学校評価について ※小学部から専攻科までのそれぞれの児童生徒の実態に応じた情報教育(ICT 活用)を、さらに進めてほしい。</p> <p>○学校経営方針について ※センター的機能はインクルーシブ教育へと繋がるから、地域の視覚障がい教育を担当する教員を育てる視点で取り組んでほしい。</p>

府立視覚支援学校（高）

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的 目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1 一人ひとりを大切に した教育の推進	(1) 重複障がいのある児童・生徒の指導の充実 ① 自立活動研究会の活動の充実 ② 進路指導の充実 (2) 教材・教具の研究 ③ 情報管理教育部の研究活動の充実 ④ 全国点字競技会の主管	① 自立活動研究会を中心にA D Lチェックリストを作成し、全教職員が活用できるようにする。 ② 卒業後の進路実現が困難な重複生徒の進路指導を充実させるために、職場実習先・通所体験先を開拓し、就労・通所等へ繋げる。 ③ 「タブレット型P C」の活用を図る。校内に無線L A Nの環境を整備する。各学部の実践をととして学習環境の改善を図る。具体的な実践をまとめ、その成果を全国レベルでの研究会で発表させる。 ④ 11月に全国盲学生点字競技大会が開かれる。この主管校として、校内に新たに委員会を設置する。この競技会の運営を通して学校全体で点字の専門性を見直す機会にする。	① A D Lチェックリストが完成する。 ② 職場体験（H23:2件）、体験通所（H23:5件）の件数が増加する。 ③ 全日盲研で発表し、ホームページでも発表する。指導できる教員が増える。生徒が実際に学習に活用している。 ④ 全国盲学生点字競技大会の円滑な運営ができ、アンケート等で評価を受ける。	① 自立活動研究会を中心にA D Lチェックリストの試行を2学期に終え、次年度からの実施に向けて最終の検討に入った。(○) ・次年度は、全教職員で重複障がいのある生徒の指導に活用したい。 ② 多くの施設等での体験や実習がより適切な進路選択に繋がるので、進路部教員が情報収集にあたり、施設等を開拓した。6人の生徒が、職場体験（1件）、体験通所（4件）、施設見学（12件）に参加した。(○) ・引き続き職場実習先・通所体験先を開拓し、就労・通所等へ繋げたい。 ③ 中期計画推進費によりタブレット型P C、電子黒板、無線L A N等の環境整備を終えた。教職員が主体的に活用できるようなマニュアルづくりの準備を進めている。(○) ・タブレット型P Cの活用事例をHPに積極的に公開している。注目度も高く、国内の大学や外国からの訪問があった。(◎) ・文部科学省主催「国内のICT教育活用好事例の収集・普及・促進に関する調査研究事業」研究発表会や東京大学等が中心になって取り組まれている「魔法のじゅうたんプロジェクト」報告会で発表した。また、来年度の全日盲研での発表が決まった。(◎) ・がんばった学校支援事業の支援を受けて視覚障がい者用のパソコンの環境整備が行えたことで、専修部の授業でのICTの活用に見通しがついた。(○) ・次年度はICTを活用して指導できる教員を増やすとともに、児童生徒自身が教材・教具として活用できるようにしたい。 ④ 全国盲学生点字競技大会に主管校として30人ほどの教職員体制で取り組み、無事終了した。問題作成、採点などの業務を通して、教職員個々での点字の専門性が確実に向上した。また、学部を超えての準備で、学校としての点字指導を見直す良い機会になった。(◎) ・全国盲学生点字競技大会において、総合部門で最優秀の学校賞を本校が受賞した。生徒のがんばりと教職員の専門性の成果である。(◎) ・今後、校内で評価を集約し、次期主管校に引き継ぐ。

府立視覚支援学校（高）

2 センター的機能	<p>(1) 理解啓発活動と地域貢献活動の充実</p> <p>① 高校（生）への広報活動の充実</p> <p>② あん摩等の臨床実習の拡充</p> <p>③ 音楽科を中心とした活動</p> <p>④ 全国盲学校野球大会の運営</p>	<p>① 視覚障がいのある生徒が高校に在籍しているにもかかわらず、支援要請や専修部への新卒生の入学がほとんどない。高校（生）への広報活動によりニーズの掘り起こしを行い、支援に結びつける。情報を確実に伝えるため、ホームページの充実や説明会・オープンキャンパスなどを開催する。</p> <p>② あん摩・指圧・マッサージの臨床実習を、校内の臨床室だけでなく校外の特別養護老人ホームなどの福祉施設や公民館などの公共施設等でも実施する。産業教育フェアなどの福祉イベントにも積極的に参加する。</p> <p>③ 地域での演奏活動を生徒指導の一環と捉えるとともに、本校の教育の理解推進を図る。そのために、校内組織としての支援体制をつくる。</p> <p>④ 全国盲学校野球大会の主管を本校が務める。その運営を円滑に進めるとともに、全盲野球を通して障がい者理解啓発を進める。</p>	<p>① 説明会・オープンキャンパス等の開催回数と参加人数が増える。</p> <p>② 臨床室の患者数及び校外での実習回数が増加する。</p> <p>③ 演奏活動を実施し、アンケート等で評価を受ける。</p> <p>④ 全盲野球の支援者を増やす。ボランティア数、Tシャツの販売数等が指標になる。</p>	<p>① 説明会（学校見学会）を7月2日と11月2日に実施し、全学部で49人、その内専修部関係では6人の参加があった。また、専修部オープンキャンパスを8月26日と11月18日に実施し、それぞれ10人と9人の参加があった。（○）</p> <p>・今後も、ニーズのある人に確実に情報が届くよう広報活動を進めたい。</p> <p>② 校内での臨床実習（あん摩・鍼）では、年間延べ2000人以上の方に施術した。また、校外臨床実習として、特別養護老人ホームなどの福祉施設や地域の公共施設など7か所で、延べ16回208人の方にあん摩・マッサージの施術をした。さらに、大阪府産業教育フェアにも参加した。これらの取り組みにより、生徒の施術のスキルアップが図られるとともに、地域支援や視覚障がい者に対する理解啓発にもなった。これらの取り組みの成果が評価され、がんばった学校支援事業の支援校に選ばれた。（◎）</p> <p>③ 大型商業施設でのコンサート、ライオンズクラブや公共ホールでの招待演奏、音楽コンクールへの出場（入賞）など積極的に音楽活動に取り組んだ。これらの活動は、生徒のスキルアップとともに、本校への理解啓発に貢献した。（◎）</p> <p>・6回目を迎えたジョイフルコンサートは、今年も盛況であった。観客アンケートでも高い評価を受け、地域の本校への期待を感じた。特に、47名の教職員が5名の生徒とともに合唱団を編成しコンサートに出演したが、この活動を通して教職員の一体感が醸成された。（◎）</p> <p>④ 全国盲学校野球大会の主管を務め、無事終了した。すべての教職員が組織を意識して個々の役割を果たす中で、一体感を味わい学校組織の活性化が図れた。（◎）</p> <p>・共に主管を担当した大阪市立視覚特別支援学校との連携もさらに深まった。（◎）</p> <p>・高校生による大会マスコットやポスターデザインコンクール、開会式への赤星氏（元阪神）の参加、Tシャツを記念品とする協賛活動、企業等からの協賛、そして教育委員会の協力など多くの方から支援を受け、障がい者理解は確実に広げることができた。（◎）</p> <p>・全盲野球での全国優勝を勝ち取ったことは、選手の自信につながり、教職員や他のクラブ活動の選手の刺激になった。（◎）</p>
3 教育者としての資質向上	<p>(1) 専門性の向上 専門性の維持・継承は本校の責務である。一人ひとりの教職員はプロ意識をもって専門性の向上に努めなければならない。</p> <p>① 教科における専門性の継承</p> <p>② 点字講習会の参加促進</p> <p>③ 専修部教員の資質向上</p>	<p>① 学部を超えた教科別研究会の充実を図り、教科指導の専門性を継承する。特に、英語・数学・理科の教科においては、チームティーチングで教員間での育成を図る。</p> <p>② 点字講習会を長期休業中や放課後などで実施することなく、時間割に組み込み、参加しやすい環境づくりをする。2年目にあたり、グループを2つに分けて拡大する。さらに点字技能士の試験を受ける者がでてくれれば支援する。</p> <p>③ 専門的な研修の機会が少ない専修部の教員の資質の向上を図るため、校内外の研修会・研究会に参加させる。</p>	<p>① 英語・理科・数学の点字教材が完璧に作成できる。</p> <p>② 点字講習会の参加者が15人以上となる。</p> <p>③ 校内外での研修会・研究会への参加者数が増加する。</p>	<p>① OJTにより教科指導の専門性の継承を続けた。</p> <p>・英語と数学の点字においては、先輩教員の指導のもと次世代の教員も熱心に取り組み、見通しが持てるようになった。（◎）</p> <p>・11月24日に、「科学ヘジャンプ」を本校が近畿地区の主管となり本校を会場にして実施した。これは、視覚に障がいのある生徒対象に授業を行い科学の楽しさを伝えるとともに、視覚障がい教育の授業力を高める全国的な取り組みである。本校からも理科の教職員を中心に、30人参加した。大学の先生や他校の優れた教員の授業に接し、教員の授業力を向上させる貴重な研修の機会になった。次年度も「科学ヘジャンプ」の主管校を引き受け、授業力向上のための研修の機会としたい。（◎）</p> <p>② 点字講習会を時間割に組み込み、専門性を向上させる枠組みを仕掛けて2年目になる。参加者は8人で点字技能士に合格する教員も出た。計4人が資格を有するようになった。（○）</p> <p>・次年度も定期的な学習会を設定して、目標をもって、点字の専門性を継承したい。</p> <p>③ 専修部の教員を全国規模の研究会や研修会（東京、山形、名古屋、四日市、鹿児島）に、11件14人を参加させた。また、府内の大学で研修したり、医療業界関係の研修に参加する教員もいた。（○）</p>
4 人材育成 社会に貢献する	<p>(1) 専修部の進路指導の充実</p> <p>① 職業自立100%をめざす。</p>	<p>① 保健医療科、理療科、理学療法科において、生徒それぞれの取得目標の国家試験（あん摩・指圧・マッサージ師、鍼師、灸師、理学療法士）合格と資格を活かした就職をめざして、個々の生徒の実態に応じて適切な指導を行う。</p>	<p>① 保健医療科、理療科、理学療法科卒業生の国家試験合格率と就職率が共に100%。</p>	<p>① 国家試験をめざし、普段の授業に加え放課後や長期休業中に補習を実施し、学力の定着を図った。100%の合格が期待できる状況である。（○）</p>